

和

漢

薬

7

2008 No.662

wakanyaku

大地の恵みが からだに優しい



オオツヅラフツ

太陽と、土と、水と 31 山本廣史

大塚医院とウチダ和漢薬 大塚恭男・渡辺賢治・井上義則

ブリアチア共和国（ロシア）におけるマオウ属植物調査旅行 5 御影雅幸・垣内信子

民間薬のお話（その11）ゲンノショウコ GERANII HERBA 月岡康行

関西レポート（58）日本の伝統医学と日本化プロセス 若山育郎

自然が育む健康 — 医食農同源のサイエンス — 3 池上文雄

大塚医院とウチダ和漢薬



修琴堂大塚医院
大塚恭男 先生



元ウチダ和漢薬
井上義則



【聞き手】

慶応義塾大学漢方医学センター
渡辺賢治 先生

渡辺先生 (以下、敬称略) : 本日はお忙しいところを「和漢薬」のためにお時間を頂戴しまして有難うございました。本日はウチダ和漢薬からは井上義則さんにお出でいただき、大塚医院とウチダ和漢薬の昔について大塚恭男先生にお話いただきたいと思えます。

大塚先生 (以下、敬称略) : 大塚医院とウチダとの付き合いは相当長い年月になりますね。戦争が終わって西荻に仮住まいをしていたのですが、現在の四谷に越したのが昭和30年ですからそれから半世紀以上が経ってしまいました。私は東京大学を卒業したばかりで第一内科でインターンを始めた頃です。私自身は大学で内科をやっておりましたので大塚医院の手伝いはしておりませんでした。

ここで大塚医院を始めた当初は神楽坂や西荻時代の患者さんが主で、まだそれほど患者さんも多くありませんでした。

段々と口伝えに広がっていったのに加え、敬節がその後TV、ラジオに出演することによって患者さんが一気に増えました。狭い待合室だけでは収まらなくて廊下にまでびっしりと患者さんがいて歩けないほどでの時もありました。

その後診察する患者さんの数を30名に絞ったのですが、その順番を取るために遠方からの患者さんも朝3時くらいから並んでいました。順番を取るために、夜中から寝袋持参で並んで待っているのです。受付時間は朝6時からだったので、その時間になって順番札を配っていました。

ある日、近所で火事があり、夜中に並んでいた患者さんも疑われ、警察から大塚医院の患者のリストを

見せろと言われたこともあります。他に漢方をやる人があまりいなかったこともありますが、患者さんも大変な思いをして来ていただいたのですね。

井上 : その頃のことはよく覚えております。その当時会社は日暮里ではなく本町にあったのですが、私が担当で、自転車で配達していました。当時は自動車も多くなかったのんびりとした時代でしたが、毎日のようにダンボールに生薬を詰めて通ったものです。時には1日1往復では足りなくて2往復したこともあります。

当時大塚医院で使用していた生薬の量はウチダとしてはダントツで、仕入れの量が多かったのを覚えています。それを薬局の窓から投げ入れるのですね。大塚医院は薬剤師さんが随分といましたよね。

渡辺 : そんなに沢山のいたのですか？

大塚 : そんなことはないですよ。調剤室が狭いから多く見えただけで、実際には2-3人で調剤していたと思います。一番多いときで5、6人いたかもしれませんが、交替交替でやっていたように思います。しかし一人一人の調剤は本当に速くて今では考えられない作業をこなしていました。薬剤師さんたちの多くは近くの鍼灸学校へ通って鍼灸の勉強をしていました。

生薬の配達は今もお昼前後でしたね。

今の調剤はグラム単位で計って処方していますが、当時は合じだけの本当のさじ加減だったのですが、皆熟練の薬剤師さんばかりでしたね。

井上 : その当時、大塚医院の庭にはケールが植えてあり、虫がつくので、若奥様がお世話されていたのを覚えてます。現在の生薬は袋が密封してあるので、

中を取って見ることはできませんが、当時は紙袋を麻紐で縛っていました。日暮里の内田家の自宅兼工場で袋詰め等の作業を行っていたので、生薬加工を全員が体験しており、営業も中身についてよく知っていました。

しかし敬節先生はさらにその上を行くくらい詳しく、生薬を一目見て、良し悪しが直ぐ分かる方でした。良い生薬を持っていくと「これはいい物だ、これなら持ってきてくれ」と言われました。特に㊦(マルダイ)として大塚医院専用の1.5kg包装の生薬がありましたが、これは品質が良く、大塚先生が認めてくださったものでした。

渡辺 : やはり生薬はウチダのものが多かったのでしょうか。

大塚 : 当時、大塚医院で扱っていた生薬の殆どはウチダ和漢薬のみでしたが、薬が偏るので紀伊国屋からも購入していました。ただしいろいろな会社から購入することはありませんでした。逆にウチダさんにはいつも「いい品質のものを入れてくれ」と言っていましたね。

井上 : それだけ要求が厳しかった。敬節先生に「この品物はまずいよ、(仕入れ先に) 返した方がいいよ」と言われた事もしばしばありました。「値段は少々高くてもいい、良いものを納めてくれ」といつも言われていました。良いものはまとめて、500-600万円を買っていただくことも珍しいことではありませんでした。

こうした敬節先生の要求に応えなくては行けないので、創業者の内田庄治の生薬に対する鑑識眼はすごかったですね。いいものは思い切って一度にまとめて買っていたので道修町の間屋街では有名で、皆さんに覚えられていたそうです。

社員に対しても「絶対に薬局や素人をごまかしてはいけません」といつも言っていました。例えば、「大和芍薬として普通の芍薬を納めても、一度や二度はごまかせるが、もし何かあった時にどうするのか」「真っ当な品物は高い、偽物は安い。儲けの為に一回でもそれをやれば信用を無くす」といつも言っていたのを覚えています。曲がった事を一切認めませんでした。「ウチが高いのは当たり前だ」とよく言っていた。「まっとうなもの高いんだと。一時の金儲けの為はだめだ」と口癖のように言っていました。

大塚 : ある時、大阪の他の業者が安い生薬を持ってきた

ことがありましたが、敬節は一目見てこれはだめだと言っていました。

井上 : 私も営業でしたが、自宅兼工場へ行って生薬を刻んだり、袋詰を手伝っていました。内田庄治社長には「生薬をよく覚える。芍薬、当帰等は噛んで味を覚える」とよく言われたものです。芍薬は大和のものはほんのりと甘味があるが、悪いものは苦い。カットについてもかなり厳しかった。

渡辺 : 同じ生薬でもカットが違えば、薬の効果も違うということでしょうか？

大塚 : 刻み方によってやはり効果の違いはありますね。敬節は生薬のカットもかなりこだわりがあり、いろいろうるさく注文していました。ウチダ和漢薬はその指示通りの刻み生薬を納めてくれました。他の業者のものの中には目方を増やす目的でゴミ(中粉)みたいなものがよく入っていました。またキリシマサイコを持って来た業者の製品の中に紫根が混ざっていたこともありましたが、あと、水につけたものはアクが出て効き目が無くなるので良くないとよく言っていましたね。

「いくら腕が良くても薬が悪ければだめだ」と口癖のようによく聞かされた。そういう点でウチダの薬は父が信頼して止みませんでしたし、社長さんもよくその要望に応じてくれたと思います。いわばこの二人が煎じ薬の生薬の質を高めるのに大きな役割を果たしたように思います。

井上 : 恭男先生は当時「東大の教授は沢山みているけれど、おやし程勉強する人はいない」と言われていたほど、敬節先生は勉強家でした。先生のおっしゃるとおり、敬節先生の要求に応じているうちにウチダの生薬の品質がどんどん向上していったように思います。

渡辺 : エキス剤中心の現在のよう漢方医療ではなかなか生薬を見る目が養われず、生薬を出す場合にもどうしても薬局任せになってしまいます。しかし、湯液治療において、治療効果を上げるためには生薬に対するこだわりが非常に重要であるということが言えるかと思えます。漢方医学を日本の伝統医療として、世界へ発信していく上で、大切なことは医療文化として漢方医学を発信することです。東西医学の融合の中で日々進化する漢方医学の中で、質の良い生薬を用いるということは大切なことだと思います。本日は貴重なお時間を有難うございました。

(2006年1月16日、修琴堂大塚医院にて)